

7 母子入院となった「母親の思い」について

○藤橋 希（赤穂市民病院）

I. はじめに

小児が入院する場合、入院する子どもと母親の精神的側面を考慮して、母親が入院時に付き添う形を取ることが多くみられる¹⁾。母親が付き添う場合、残された家族の世話を誰が代行するか、付き添う母親の食事・休息・保清の問題が課題とされている²⁾。また、先行研究では、母子入院した母親の心配事などの実態が明らかにされ³⁾、付き添いをする家族への援助の必要性が示唆されている。A病棟では、母子入院をしている母親が、生活リズムの違いや子どもの泣き声などで、同室者に気遣う姿を目のあたりにすることがある。

そこで、母子入院した母親の思いを知ることで、今後の看護に生かしていきたいと考えた。

II. 研究方法

1. 調査協力者 母子入院となった母親3名（母親A：入院歴のある5歳10か月の脱水症の子どもの母親、母親B：入院歴のある3歳7か月、5歳9か月の喘息の兄弟の母親、母親C：初めての入院で発熱、気管支炎の3か月の子どもの母親）
2. 調査期間 2010年9月～10月
3. 調査方法 半構成的面接調査を行った。質問内容は、入院中に不安に感じたこと、困ったと、ストレスになっていることとし、後は自由に語ってもらった。インタビューの内容は、研究協力者の承諾を得て、テープレコーダーに録音し、逐語録を作成した。意味内容が同じようなものを分類し、カテゴリー化し、母親の思いとして整理した。
4. 倫理的配慮 平成22年度赤穂市民病院研究倫理審査による承認を得た。

III. 結果

A病棟では小児は感染症、脱水による入院が多く、ほとんどの場合緊急入院である。突然母子入院となった母親は、「入院になるとは思っていなかった」「初めての入院で何もわからなかった」など、不安は大きく、また、処置に時間がかかると不安が増強していた。A病棟の総室での入院は、医師の意向により成人と同室のことが多く、母親は子どもの泣き声等でストレスを感じていた。個室に入院した場合、「面会がしやすかった」「入院生活が長くなると出費が大きい」など精神的負担は軽減されたが、反対に経済的負担は大きかった。母子入院した母親への援助や残された家族の世話について、夫や実父母の協力の場合、母親の身体的、精神的負担は軽減されたが、義父母の場合、「協力してくれたが気を使った」というように精神的負担となっていた。

IV. 結論

1. 突然母子入院になった母親は、不安が大きく子どもの処置に時間がかかると不安が増強した。
2. 個室に入院することで、精神的負担は軽減されたが、経済的負担は大きかった。
3. 夫、実父母の援助の場合、母親の身体的精神的負担は軽減されたが、義父母の場合精神的負担となっていた。

1) 倉橋理香他：小児の入院と母親の付き添いがきょうだいに及ぼす影響，第40回日本看護研究論文（小児看護）p87－88（2010）

2) 中西睦子：小児看護学 p100－101（2006）

3) 江森寛子他：入院患者に付き添う家族の負担，第35回日本看護学会論文集（小児看護）p18－19（2005）